

入来牧場放牧育成雌牛の登録審査成績の特徴

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-10-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 紙屋, 茂 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10232/9763 |

入来牧場放牧育成雌牛の登録審査成績の特徴

紙 屋 茂

目 的

入来牧場では周年放牧繁殖素牛を放牧育成している。登録審査時の得点は市場に出荷される子牛の能力の一指標として重要視される。

そこで、本調査では入来牧場の繁殖素牛放牧育成技術を向上させるための基礎資料を得る目的で、登録審査時の栄養度、発育値および審査得点の年度間の違いや相互関係を明らかにしようとした。

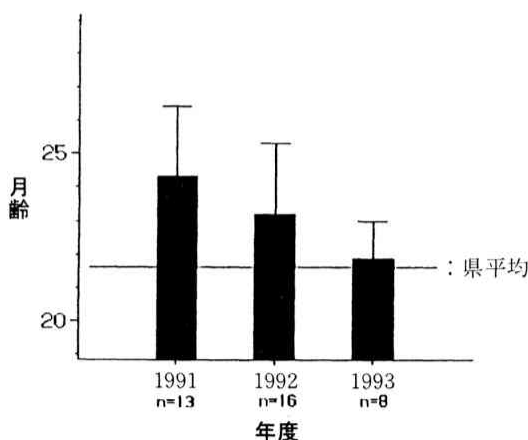
材料および方法

入来牧場で1991年から1993年までの3年間で登録審査された37頭の繁殖牛の審査月齢、栄養度、体尺測定値および審査得点について、年度間の違いや測定値相互の関係を分析した。

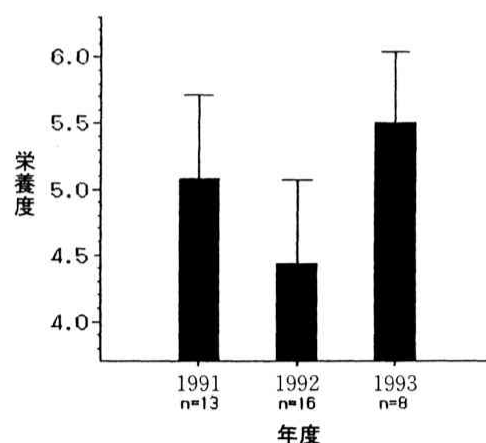
結果と考察

審査月齢は年度が進むごとに舎飼牛の鹿児島県での平均月齢と同じ月齢まで短縮された（第1図）。栄養度は1992年が特に低く、1991年および1993年が高い傾向を示した（第2図）。体高は1992年に低く、1993年では舎飼牛の県平均値に近い値を示した（第3図）。胸深は1991年および1993年が深い傾向にあったが、県平均値より小さい値を示した（第4図）。尻長およびかん幅は年度間の差は少なかったが、県平均より特に小さい値を示した（図5、図6）。審査得点は1992年が低く、1993年が高い得点を示した（第7図）。3年間の審査得点別頭数では、79.5点から81点のクラスが多く見られた（第8図）。体積・均称の減率と審査得点の関係は負の相関を示した（第9図）。栄養度と審査得点の関係は、栄養度が4～6の範囲においては正の相関を示した（第10図）。

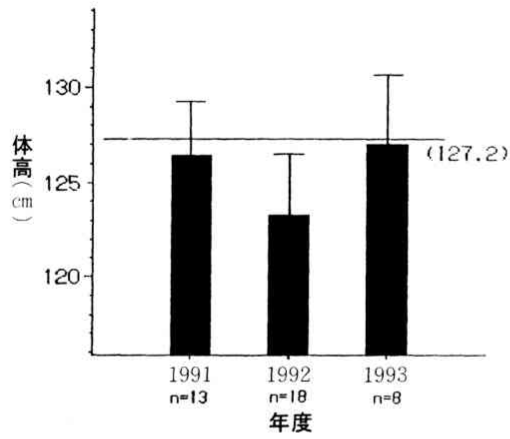
以上のことから繁殖素牛を放牧育成する場合は栄養度を6に維持することが重要であると考えられた。



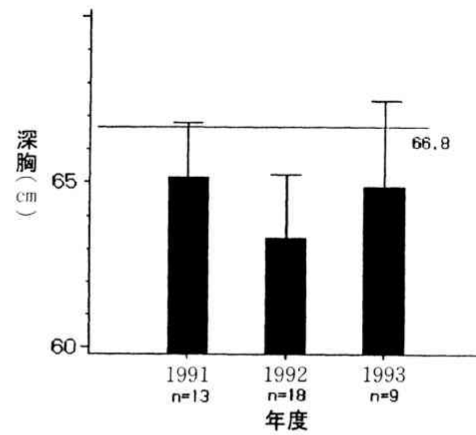
第1図 放牧育成雌牛の年度による審査月齢の違い。



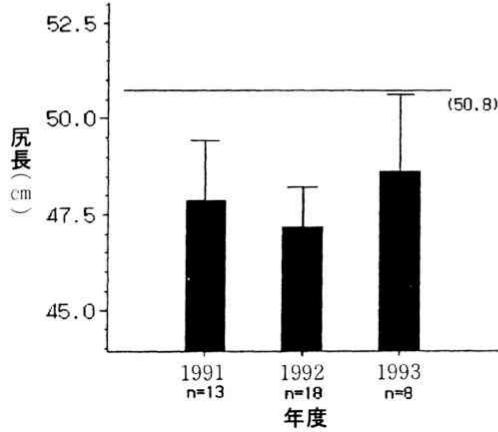
第2図 放牧育成雌牛の年度による栄養度の違い。



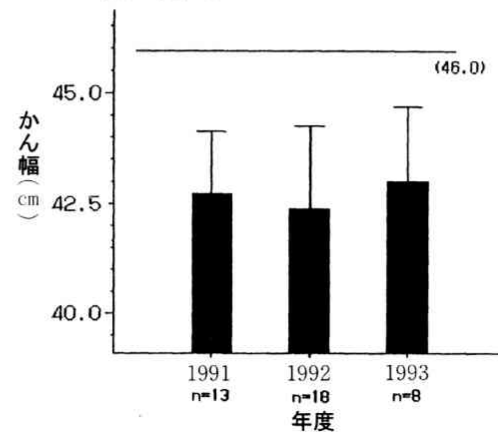
第3図 放牧育成雌牛の年度による審査時体高の違い。



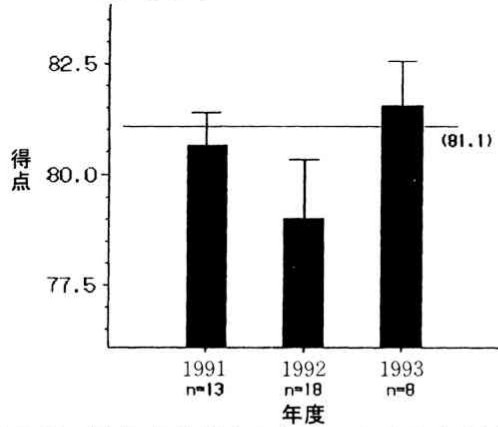
第4図 放牧育成雌牛の年度による審査時胸深の違い。



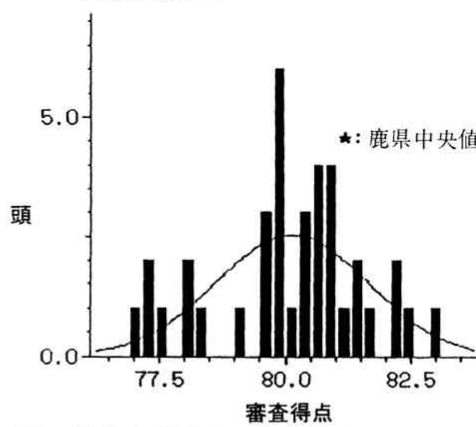
第5図 放牧育成雌牛の年度による審査時尻長の違い。



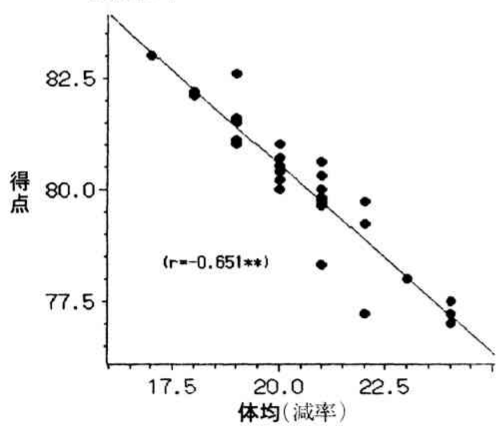
第6図 放牧育成雌牛の年度による審査時かん幅の違い。



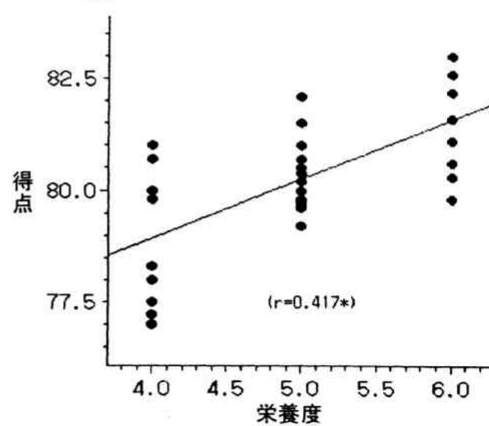
第7図 放牧育成雌牛の年度による審査得点の違い。



第8図 放牧育成雌牛の審査得点別頭数の分布。



第9図 放牧育成牛の審査における体積・均称の減率と得点の関係。



第10図 放牧育成牛の審査における栄養度と得点の関係。